

大学生のためのTwitterリテラシー入門

Introduction to Twitter Literacy for University Students

岡 田 祥 平

OKADA Shohei

1. はじめに

Twitter¹⁾とは、「[自分がいま何をしているか]という「つぶやき(ツイート)」を140文字以内という短い言葉で書き込むことで、メッセージを気軽に交換し交流しあえるサービス」(大月宇美2015)のことである(詳細は2.節を参照)。筆者は現代日本語の研究に携わっているが、岡田祥平(2013)以降、Twitterを現代日本語研究に利用することの可能性を模索、実践する中で、Twitterに触れる機会が非常に多くなった。その中で、特に大学生のTwitterの利用の問題点にも気付くようになった。

Twitter利用者の問題点、問題行動が特に世間の耳目を集めたのは、2013年夏のことのように思う²⁾。たとえば、新潟日報の2013年9月18日付朝刊には、以下のような記事(コラム)が掲載されている。

見出し： [座標軸]「冷蔵庫事件」影響の大きさを想像して

飲食店の従業員が店の冷蔵庫などに入った写真を、自らネットに自慢げに投稿し問題となる「冷蔵庫事件」が各地で続いている。(中略)

写真の投稿先となるツイッターやフェイスブックは、親しい仲間同士のコミュニケーションに便利な道具だ。だが、使い方に注意が必要なのが再三指摘される。

設定によってはどんなプライベートな話も外部の人に筒抜けになってしまうのが、これらのサービスの特徴だからだ。(中略)

まず、道具の特徴をしっかり意識することだろう。さらに重要なのは、一つの行動がどんな影響を及ぼすかという想像力ではないか。

いずれの投稿も、冗談やギャグとは程遠い。そうした認識のない人には周囲が教える必要がある。相手が子どもなら、その役目は大人だ。(論説編集委員・吉岡和彦)

上記引用文中にあるような「冷蔵庫事件」に代表されるTwitterで起きる「炎上」(「ネットでなにか事件がおこって、多数のネットユーザーによって批判にさらされること」川上量生2015)の事例の背景について、高橋暁子(2014)に以下のような指摘がある。

今の中高生はネットリテラシー教育を受けているケースが増えてきたが、大学生は受けないまま現在に至っているケースが多い。それ故、ツイッターで炎上被害が起きるのは大学生が多いのだ。特に、大学に入学したばかりの大学1年生は炎上させてしまう子が多いと聞く。入学したことで気が緩んでいる上、学校に帰属意識が乏しく、迷惑をかけることなど考えていないせいだろう。

筆者が気付いた大学生のTwitterの利用の問題点は、幸いなことに新聞沙汰や「炎上」につながった事例はない。しかし、「炎上」に至る可能性をもった火種を見かけることは少なくない。すなわち、「プライベートな話も外部の人に筒抜け」となっている事例や、「冗談やギャグとは程遠く、当該ツイートをした人の

人間性や、その人が所属している機関や組織の信頼性を大きく損ねる結果を招きかねないツイートが、少なからず見かけたのも事実である。

そのような現状を看過できず、また、「そうした認識のない人には周囲が教える必要がある」という上に引用した新潟日報の記事の言も受けて、筆者はあえて「大人」の役目を引き受け、Twitterを安易な感覚で使っている（高橋2014の指摘によれば、ネットリテラシー教育を受けないまま現在に至っているケースが多い³⁾）大学生に対し、警鐘を鳴らす文章を書くことにした。

本稿では、まず、2. 節でTwitterの仕組みを概説したうえで、3. 節で特に若年層のTwitterの使用状況について種々の調査結果を紹介する。そのうえで、4. 節では、筆者が散見した大学生のTwitterの使用状況の問題点を踏まえ、Twitter利用に関する留意点を述べる。5. 節では、4. 節で指摘した留意点を踏まえた場合であっても、「完璧な対策」を取ることは困難であることも指摘する。最後に、6. 節で本稿のまとめを行う。

本稿で述べることは、Twitterの使用に細心の注意を払っている方にとっては特に目新しい事実はないとも思われるし、さらには、重大な点も見落としている可能性もある。本稿は、あくまでもTwitterを現代日本語研究に利用しようとしている筆者が気づいた範囲のところをまとめたものである（特に、筆者の現在の所属が教育学部であるということから、教育実習に行くことになっている教育学部の学生を強く念頭に置いて執筆した）。その点をあらかじめお断り申し上げるとともに、本稿を機に、Twitterにより詳しい方が、大学生のために系統だったTwitterリテラシー入門の文章を書いてくださることを祈念している。

2. Twitterとは

1. 節でも述べた通り、Twitterとは、「自分がいま何をしているか」という「つぶやき（ツイート）」を140文字以内という短い言葉で書き込むことで、メッセージを気軽に交換し交流しあえるサービス」（大月2015）のことである。その仕組み、仕様については、インターネット上や種々の書籍で説明されているので、Twitterに本格的なご関心がおありの方は、それらの文献をご参照いただきたい。ここでは、Twitterの仕組み、仕様のうち、本稿に関係することを中心に、ごくごく簡単に説明する。なお、本節の説明のうち、出典を明示しない文章については、すべて、Twitter社日本語公式ページの「Twitterヘルプセンター>Twitterへようこそ>Twitter用語集」（<https://support.twitter.com/groups/50-welcome-to-twitter/topics/204-the-basics/articles/243951-twitter#>）からの引用であることをお断りしておく。

Twitterには、自分の「プロフィール」がまとめて表示される画面がある。その画面が図1である。図1の上部の①「プロフィール画像」、②「名前」、③「ユーザー名」、④「自己紹介」の部分が、当該Twitterユーザーの個人情報にあたり、ユーザーが自由に設定できる部分である。「プロフィール」表示画面の各箇所が表示内容についての説明は、図1をご参照いただきたい。

一方、図2は、タイムラインと呼ばれる、「自分やフォローしているユーザーなどのツイートがリアルタイムに表示される画面」である。図2の場合であれば、「日本経済新聞 電子版」「朝日新聞」「YOL 社会」という三つのアカウントから発せられたツイートが、時系列に表示されている（ツイートされた時間が新しいツイートものほど、タイムラインの上部に表示される）。

また、自分以外のアカウントから発せられたツイートを自分のタイムラインに表示させるために登録することを、「フォロー」と呼ぶ。あるアカウントがフォローをしているアカウントの数は、「プロフィール」画面に表示される。たとえば、図1に示した日本語版Twitter公式アカウント「TwitterJP」の場合であれば、63のアカウントをフォローしていることがわかる（図1の④「自己紹介」欄の下の「63フォロー」という表示）。

一方、「フォロー」の逆、つまり、自分が発信したツイートをタイムラインに表示させるように、自分のアカウントを登録してくれた、自分以外のTwitterのアカウントのことを「フォロワー」と呼ぶ。あるアカウントのフォロワーの数も、「プロフィール」画面に表示される。たとえば、図1に示した日本語版Twitter公式アカウント「TwitterJP」をフォローしているアカウント=フォロワーの数は、1,748,980であることがわかる（図1の④「自己紹介」欄の下の「1,748,980フォロワー」という表示）。つまり、フォロワー数が多い

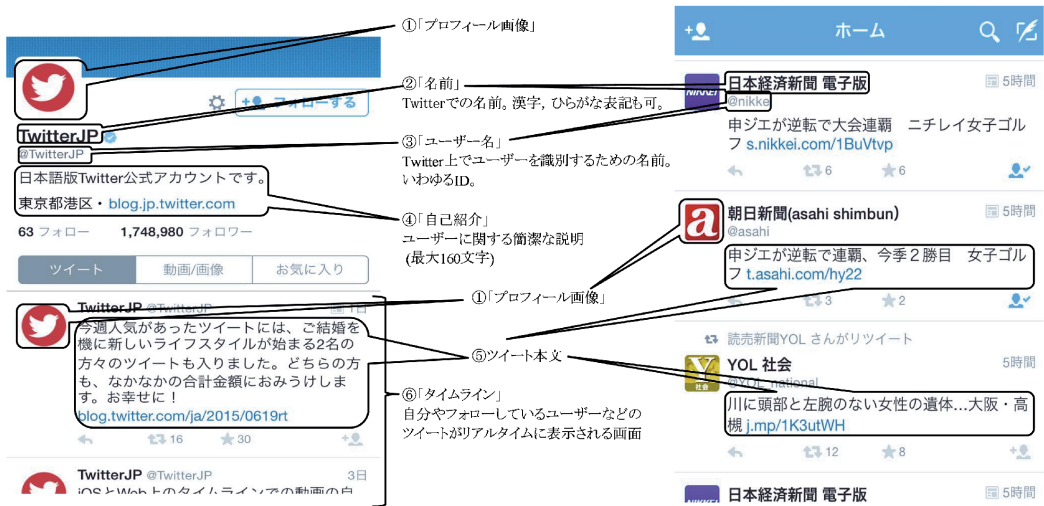


図1 Twitterの「プロフィール」表示画面⁴⁾
 (日本語版Twitter公式アカウント「TwitterJP」⁵⁾より)

図2 タイムラインの表示例
 (筆者個人のアカウントより)

アカウントほど、多くの人に当該アカウントが発したツイートが配信されるということの意味する（それは、すなわち、Twitterの世界において、影響力を持つアカウント⁶⁾と言えそうである）。

なお、Twitterユーザーは、「ニュースや価値のある情報などを伝えるため」にツイートを自身のフォロワーに転送することが、しばしばある。このように、「フォロワーに転送したツイート」のことを「リツイート」と呼び、「他のユーザーのツイートを自分のフォロワー全員と共有する」動作のことを「リツイートする」と呼ぶ。たとえば、図2のタイムラインの上から三つ目に表示されている「YOL社会」からのツイートをよく見ると、「読売YOLさんがリツイート」という注記がある。つまり、図2のアカウントは「YOL社会」を直接フォローしているのではない（図2のアカウントは「YOL社会」から直接ツイートを受けたのではない）、ということである。図2に表示されている「YOL社会」からのツイートは、図2のアカウントがフォローしている「読売YOL」というアカウントがリツイートしたものを受け取った結果なのである。

このリツイートの機能は、Twitterの諸問題を考えるうえで無視することができない。たとえば、津田大介(2009)は、Twitterの特徴（註20も参照）の一つとして「伝播力が強い」という点をあげているが、その理由の一つとしてTwitterのリツイート機能をあげている。

なお、Twitterではツイートを「公開」するか「非公開」にするかの選択ができる。「公開ツイート」は「Twitterアカウントを持っているかどうかに関係なくすべてのユーザーが閲覧可能」、つまり、インターネットに接続できる環境にある人であれば、誰でも閲覧可能なツイートのことである。一方、「非公開ツイート」とは、「許可されたTwitterフォロワーのみが閲覧可能」なツイートのことである（以上、「Twitterヘルプセンター」>アカウント>公開ツイートと非公開ツイートについて」<https://support.twitter.com/articles/243055#>より）。Twitterの利用する際、特別な設定をしない場合は「公開ツイート」となる（この件に関しては、4. 節のIVでの議論も参照）。

以上がTwitterの仕組み、仕様のごくごく簡単なあらましである。本稿の以降の記述の中で、理解不能な用語が出てきた場合は、本節に立ち戻っていただきたい。また、本稿の以降の記述の中で、本節で説明しなかったTwitterの仕組み、仕様に言及する場合は、その箇所で随時、説明を加えることにする。

3. 若年層（大学生）のTwitterをめぐる状況

世代別のTwitter利用率に関する調査は種々のものがあるが⁷⁾、本稿執筆時点で利用できる最新のデータで

ある総務省情報通信政策研究所の「平成26年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査 報告書」(平成27年5月発表⁹⁾)によると、「Twitterは10代⁹⁾20代¹⁰⁾の利用率が各49.3%、53.8%と高くなっている」¹¹⁾という記述がある(当該報告書の77ページ)。また、筆者の講義の受講生を対象¹²⁾にTwitterの利用状況を問う簡単なアンケート調査¹³⁾を行ったところ、Twitterの利用率¹⁴⁾は84.4%(男性77.8% 女性88.0%)であった。さらに、大学生のTwitter利用率を調査したのも多数存在する¹⁵⁾が、これらの調査結果でも、現在の大学生の多く(過半数)はTwitterを使用しているということが報告されている。

以上の結果に鑑みると、大学生の半数以上はTwitterを利用していると考えて良さそうである。

また、4.節のIで見えるように、現代の若年層は、一個人が複数のTwitterアカウントを使い分けたり、逆に同一Twitterアカウントを複数人で共有する場合もあったりするようである。実際、上述した筆者が行った小調査に対するコメントの中にも、「五つのアカウントを持っている」と記述があった。これらの事例を踏まえると、若年層はTwitterを目的に応じて多様な使用方法で活用していると言えそうである。

以上のような調査結果や報告を踏まえると、現代の若年層(大学生)にとってTwitterは非常に身近な存在であり、Twitterを器用に使いこなしている若年層(大学生)の姿を容易に想像することができる。これは筆者の日常の観察の結果とも一致する。

しかしながら、若年層(大学生)が「自分の身を守る」ことを意識してTwitterを使っているかという点、1.節で指摘した通り、いささか不安に思う事例を散見する。そこで、次節では、筆者が日常の観察で遭遇した事例を踏まえつつ、若年層、特にこれから教育実習や就職活動で、社会(学生以外の人的ネットワーク)の中に一歩を踏みだそうとする大学生に向けて、(現代日本語研究に携わる)筆者が考えるTwitter利用上の留意点を述べていきたい。

4. Twitter利用の留意点

1.節で引用した新聞記事にあるような「冷蔵庫事件」に代表されるTwitter上での「炎上」が発生するメカニズムについて、高橋(2014)は以下のように説明している。

ツイッター炎上は、次のようにして起きる。店舗でアルバイトをしている大学生などが、店舗の商品を粗末に扱ったり、商品を保存する冷蔵庫などに入り、写真を撮影する。SNSに投稿して友達にウケるためだ。ところが、このような投稿を手ぐすね引いて待ち構えている人たちがいる。そのような人たちは、問題投稿を検索して積極的に見つけ出し、投稿者をさらし者にしようとしているのだ。かくして、まとめサイト(事件や話題の情報を集約・編集したサイト)が作られ、記事にされ、企業に賠償請求されたり、大学を退学させられたり、決まっていた内定を辞退させられたりすることになる。

また、川上(2015)も、「多くのネットでの「炎上事件」は典型的に、なにか、犯罪だったり、モラルに反する行動をしたことを、実名あるいは実名が特定されるような状態でネットに情報を書き込んだ場合に発生」すると説明している。

高橋(2014)ならびに川上(2015)の説明を踏まえると、Twitter上での炎上、問題の発生を避けるためには、①不用意な内容のツイートをしなさい、②個人が特定できる情報をTwitter上に晒さない、という2点が重要なポイントになりそうである。本節では、この2点を念頭に置きつつ、筆者の視点から、Twitter利用の際には具体的にどのようなことに留意していけばいいのか、若干の考察を交えつつ、書いていきたい。

I 不用意な内容のツイートはしない

繰り返しになるが、いわゆる「炎上」するような内容のツイートはしない、というのは言うまでもない。では、具体的にはどのような内容が問題になるのであろうか。

高橋(2014)には、Twitterの「炎上」が起きる理由として、以下のような指摘がある。

炎上する理由はさまざま。未成年飲酒、飲酒運転、キセル、万引き、カンニング、賭博行為、芸能人など他人のプライバシーをさらす行為、店舗などで食品や物を粗末に扱う行為、守秘義務違反、線路に入るなど公序良俗に反する行為、差別・侮蔑的な発言、他人に対する誹謗中傷、デマ発言などだ。

大学生ともなると、アルコールを飲む機会もあり、バイトをしたり、インターンをしたりと社会的責任を負う必要が出てくる。それ故に、炎上につながる機会が増えるのだ。ウケを狙うあまり、見た目に

派手な写真をつけたり、著名人が関わっていたりするネタをアップして、余計に広く伝播させてしまうのだ。

また、「就活生がfacebook, twitterで不採用にされる原因Top5」(<http://www.jobweb.jp/post/a-22697>) というページには、以下のような投稿は避けるべきという記述がある。

1. 公序良俗を乱す内容は極力投稿しない： (例)「昨日飲み過ぎて〇〇しちゃった〜\\(^o^)」
2. 企業に関するネガティブな投稿はしない： (例)「〇〇企業はブラックだ!」, 「〇〇ってイケてないよね」
3. 選考に関する投稿はしない： (例)「〇〇のES5分で書いたわ〜☆」, 「なんか面接のおやじクウザかったわ〜まゝ余裕だしいっか〜」
4. 自分に関するネガティブな投稿はあまりしない： (例)「やべええ! 単位20個落とした!!」

つまり、高橋(2014)や、上記のインターネットのサイトの記事にあるような話題をツイートすることは絶対に避けるべき、ということである。

上記の指摘にも重なるところがあるが、筆者が実際によく見かける大学生のツイートのうち、特に気になるものが仲間内での悪ふざけや羽目はずしエピソードである。たとえば、飲み会で羽目はずし写真をアップしているツイートを見かける(そういうツイートをする人に限って、アカウントに本名を使用している)。20歳未満でそのようなツイートをするのは犯罪行為の証拠写真を全世界に拡散しているのと同じで言語道断であるが、たとえ20歳以上であっても、本人の仲間以外がそのような写真を見せられるのは、いい気分ではない。特に、教育学部の学生は教育実習として実際の教育現場の教壇に立つわけであることに留意する必要がある。実習先の生徒、児童に見られては恥ずかしいツイートは決してすべきではないと考える。また、卒業後、正規の教員として教壇に立ったときのことも考える必要があろう。自分の担任の先生が大学生時代の羽目を外した姿を見たいと思うであろうか。

また、大学生のツイートの中で多いのは、受講している授業名や担当教員の実名をあげているものである。その場合、多くは、当該授業や教員に対し否定的な評価をしている。実際、筆者も、自身の授業の反応を知るために、自分の名前や授業名でTwitterを検索することがあるが、肯定的評価のツイートにはほとんどお目にかかれぬ。もちろん、言論、表現の自由があるので、批判的なツイートを見かけても、それに対して対抗措置を取るといふことはしないが、筆者に対する批判的なツイートの多くが感情的なものであったり、下品な表現を使用していたりするものも多く、眺めていて決して気分の良いものではない。

ただ、ここで、そのようなツイートをとり上げて注意を喚起するのは、そのようなツイートに対する個人的感情に起因するのではない(多少はそのような感情が含まれていることも否定しないが)。実は、そのようなツイートをする人の多くが、Twitter上での名前が本名であったり、プロフィール欄に個人を特定できる情報を書いたりしている、という点を問題にしたいのである。この事例は、Twitterが全世界に広がっているという意識が希薄な学生ほど自身のプライバシーを保護しなければいけないという意識も希薄であり、結果として、受講している授業名や担当教員の実名をあげたツイートをしたり、Twitter上での名前が本名であったり、プロフィール欄に個人を特定できる情報を書いたりすることが多い、ということの意味しているとも考えられるからである)。

受講している授業名や担当教員の実名をあげたツイートをする問題点については、インターネット上のニュースサイト「J-CASTニュース」に取り上げあげられた事例も紹介したい。

2015年6月16日16時27分に、J-CASTニュースは、「ツイッターに「先生嫌い」と書き込むと処分されるのか 学校側の「停学提案」に「やりすぎ」の声続々」(<http://www.j-cast.com/2015/06/16237886.html>) という記事を配信した。この記事は、「沖縄本島中部にある県立高校生徒が「先生嫌い」というツイートをして、学校側から停学処分を提案された」こと、それに対し保護者やTwitter上では学校側の処分が厳しすぎであるという批判があるという事例を紹介したものであるが、この記事の中には、以下のような一節がある(傍点は筆者)。

一方、「先生の悪口」はネット上に溢れ返っている。試しにツイッターで「先生嫌い」と検索すると、教員への批判を綴る中学生や高校生のツイートが大量に見つかった。「専攻科の先生嫌いな人ばかり」「社会と情報の先生嫌い」など多くは名前を伏せているが、中には「〇〇〇〇先生嫌い」「みんな〇〇

先生?嫌い」(伏せ字は編集部)と個人名を出したのも散見される。
プロフィール欄に学校名を明記している生徒もおり、その気があれば外部の人間でも簡単に特定できてしまう。

つまり、受講している授業名や担当教員の実名をあげたツイートは、そのようなツイートから個人を特定することが可能である、という点こそが大きな問題なのである(そのようなツイートをする事自体にも議論の余地があるが)。

受講している授業名や担当教員の実名をあげたツイートをする学生は、その他のツイートでも、不用意な内容(たとえば、上述したような、仲間内での悪ふざけ様子など)であるも多い。受講している授業名や担当教員の実名をあげたツイートから、芋づる式にその他の不用意な内容のツイートを「発掘」することも可能であり、結果として、当該ツイート主の人間性に対し不信感を招き、場合によっては当該ツイート主の信頼を失墜させる、という事態にもつながりうる。

もっとも、Twitter上での「キャラクター」が、そのアカウント主の「ありのまま」の姿であるというわけではない。実際、原田曜平(2015)は、「今、多くの若者が、ツイッターのアカウントを複数持つようになっている」と指摘し、以下の表のような事例を紹介している。

表 複数のアカウントを使い分ける若者の一例(原田2015より)

	メインのアカウント			第二のアカウント		
	公開か 非公開か	内容	フォロワーとの関係	公開か 非公開か	内容	フォロワーとの関係
男子学生A	公開	日常を面白おかしく伝えるような、笑いを取りにいくものが多い	半数以上は会ったことのない人	非公開	親しい友人にしか知られたくないことや、自分の近況についての本音	親しい人のみ
男子学生B	非公開	日常のこと、趣味のこと	親しい人	公開	当たり障りのない内容	知り合ったばかりの人や微妙な距離感にある友人

原田(2015)が例にあげた二人の学生は、「吐き出したい心情など本音をつぶやく場所」(原田2015)をメインのアカウントにするか(男子学生B)、第二のアカウントにするか(男子学生A)の相違があるが、共にアカウントを使い分けている。そして、「吐き出したい心情など本音をつぶやく場所」(原田2015)のアカウントを非公開にしている、ということも共通している。

この例のように、複数のアカウントを使い分け、しかも、「吐き出したい心情など本音をつぶやく場所」(原田2015)を非公開にしていれば、問題はまだ少ない(しかし、実は、5.節のiiで述べる通り、非公開にしても注意しなければいけない点も多い)。だが、受講している授業名や担当教員の実名をあげたツイートをする学生の中には、そのような使い分け意識もない者も多いようである。それゆえ、「吐き出したい心情など本音をつぶやく場所」で受講している授業名や担当教員の実名をあげたツイートから、芋づる式にその他の不用意な内容のツイートを「発掘」されてしまうという事態になるのである。

ここまで、不用意な内容のツイートの例として、羽目をはずした姿に言及したものの、受講している授業名や担当教員の実名をあげたもの、の2例を紹介したが、最後に、筆者が散見して問題があると思った事例について紹介しておく。それは、個人的な嗜好の問題、特にsexualityに関連するものである¹⁶⁾。

sexualityは非常に繊細な問題である。近年は特にLGBT(性的少数者)の権利を保護する動きが盛んになり、sexualityに関する意識も高まっていると思われるが、その反面、「猥談」が面白おかしく展開される風潮があるのも事実である。

「猥談」が場合によっては人間関係の「円滑油」的な場合になる面は否定しない(ただし、そのことに關しての評価は避ける)。しかし、往々にしてその手の「猥談」は音声言語(音声を媒介とする言語)であるからこそ人間関係の「円滑油」的に作用するのであり、Twitterという文字言語(文字を媒介とする言語)としては人間関係の「円滑油」的に作用するとは限らないということを理解する必要がある(この点については、後述の議論を参照)。

もっとも、Twitterが文字言語という点を留意しなければいけないというのは、sexualityに関するツイートだけではない。それは、受講している授業名や担当教員の実名をあげたツイートにも当てはまる¹⁷⁾。やはり、「冗談」のつむりのツイートの多くは、「冗談」と理解されない場合も多いのである。書き手本人は「冗談」のつむりのツイートであっても「冗談」と理解されない場合も多い原因としては、Twitterが、音声言語とも文字言語の両方の側面を有している、あるいは音声言語とも文字言語でもない新たな性格を有している¹⁸⁾、ということも関係してよう。

この点については、近年、種々の指摘があるが、たとえば、石黒圭（2006）には、以下のような記述がある（石黒2006は、本稿でいう音声言語のことを「話しことば」、文字言語のことを「書きことば」と、それぞれ表現していることに注意されたい）。

まず、話しことばと書きことばの区別ですが、多様なメディアが発達してきた現代では、この区別がますますあいまいになってきています。インターネットの掲示板やチャットの書き込み、携帯電話を使った短いメールのやりとりを考えてみれば、このことはすぐにわかります。文字を使ってやりとりしている点では書きことばですが、双方向性や同時性を備えている点では話しことばだからです。一方、講義や講演といった、まとまった内容を一方的に伝えるものは、音声を用いており、聴衆の反応を見ながら話すとはいっても、書きことば的な性格を備えているといえます。

石黒（2006）はTwitterが日本に上陸していない時期に書かれた¹⁹⁾ため、Twitterについての言及がない。しかし、「文字を使ってやりとりしている点では書きことばですが、双方向性や同時性を備えている点では話しことば」という石黒（2006）の指摘は、Twitterに当てはまることでもある²⁰⁾（この点については、五味伸之ほか2011、石黒圭2014なども参照）。

しかし、Twitterは、あくまで文字言語、すなわち文字を媒介とする言語である。音声言語的な側面を持つとはいえ、やはり、基本的には文字言語なのである。以下、この点を少し丁寧に説明したい。

石黒（2006）には「典型的な書きことばと比較した場合の典型的な話しことばの特徴」が5点、挙げられている。その5点とは、以下のとおりである（以下にゴシック体で示した五つの観点は石黒2006での表現のままであるが、説明、解説に関しては石黒2006のものに若干筆者が補足したポイントがあることを付記しておく）。

ア 音声言語は、音声情報をもとなう

音声情報を伴わない文字言語では、「この人は九州方言のアクセントだといった情報やこの人は早く話しているといった情報」は、いわゆる「地の文」で説明しない限り伝わらない。

イ 音声言語は、非言語情報（話すときの表情や視線、ジェスチャーやしぐさなど）をもとなう

話し手の真意（たとえば、話し手の発話が言葉通りの意味なのか、それとも皮肉なのかと言った点）を理解するための手がかりは非言語情報の中に豊富に含まれているが、文字言語には非言語情報が伴わない（そのため、文字言語は書き手の真意を判断する手がかりが音声言語と比較して相対的に少ない、ということになる）。

ウ 音声言語は、場面をもとなう

音声言語、特に会話の場合は、「話し手と聞き手の人間関係や、相手についての知識ができる」。それゆえ、「その場で話されていれば理解できる会話でも、その場から切りはなされたときに理解できなくなってしまう場合があったり、「特定の話し手が特定の聞き手に話しているから通じる会話」があったりする。

エ 音声言語は、不整表現が多い

不整表現とは、「文法上におかしかったり整わなかったりする表現」のことである。具体的には、「倒置、言いさし、言いよどみ、繰り返し、省略、助詞の欠落、フィラー（「あー」「えーと」などの埋め草）」などがある。

オ 語彙選択の傾向が、音声言語と文字言語では異なる

「一般的な傾向として、話しことば、特に会話では和語が使われ、漢語が避けられる傾向」にあるなどの事象が観察される。

ここでは、石黒（2006）がいう「典型的な話しことばの特徴を5点」のうち、「書きことばで表現することはかなり難しい」と石黒（2006）が指摘しているア、イ、ウの特徴について、Twitterと典型的な音声言語である日常会話（代表的なものは、家族、友人との会話）と比較しながら考えたい。

日常会話は音声情報、非言語情報、場面を伴うため、それが発せられた場面や状況や文脈から「冗談」の発話か否かが分かる。しかし、文字言語であるTwitterはそれらの情報が（ほとんど）伴わない²¹⁾。しかも、Twitterは最大140字までしか投稿できないという制限があり、一つ一つのツイートが前後のツイートと切り離されてしまうため、前後のツイートとの関連性、すなわち文脈を取ることが難しい²²⁾。場合によっては、

意図的に、「ひとつのツイートだけを取り上げられ、言葉の揚げ足をとられて炎上しているケースがある」(高橋2014)という。

つまり、Twitterでの発言(ツイート)は、上述したような文字言語の制約により、それが「冗談」なのか本気なのか、にわかに判断がつかないのである。しかも、「公開ツイート」は、場面や状況や文脈を共有しない、全くの第三者も閲覧可能である。それゆえ、ツイートをした本人、そしてその本人を知っている少数の知人(フォロワー)にとってはお互いの共有知識ゆえに「冗談」と理解できるツイートが、ツイート主との共有知識を持たない大多数の第三者にとっては「冗談」とは理解できない。そのようなツイートは、場合によっては、当該ツイートをした本人(やその本人が所属する機関)の人間性や名誉を損ねることにつながる。

繰り返しになるが、Twitterは「双方向性や同時性を備えて」(石黒2006)いて、音声言語に近い側面を持つ。そのため、日常会話のように、「軽いノリ」(深く考えず、即興的に)でツイートをしてしまいがちである。しかし、音声言語とは異なり、文字言語は「残って」しまう²³⁾。双方向性、同時性といった音声言語的な性格を有するTwitterではあるが、やはり文字を媒介とする文字言語であるゆえ、不用意な内容をツイートしてしまうと、記録に永遠に残ってしまうという点(この点は、5. 節のiiも参照)は、十分に留意する必要がある。

しかも、Twitterのリツイート機能(2. 節参照)により、不用意な内容のツイートは、一気に拡散してしまう。Twitterに拡散した情報を收拾することは、事実上、不可能である。そして、Twitter上に拡散した不用意な内容のツイートから、アカウント主の個人情報を突き止めようとする動きまで出てくる。本節のIIやIIIで述べるような個人情報をTwitter上に晒していなくても、当該アカウントの主が過去に行ったツイートの内容から、個人を特定することも可能であるようである(5. 節の議論も参照)。

II 「名前」に本名を使用しない

Twitterの「名前」(1. 節の図1の②を参照)に本名を使用するのは、慎重になる必要があることは言うまでもない。「名前」を本名に使用したい場合は、自分が発するツイートが全世界に発信されるという重大性を充分認識し、責任のある内容をツイートする必要がある。

なお、Twitterの「名前」に本名を使用する場合には、いくつかのバリエーションがあるようである。以下、筆者の名前を例にあげ、説明する。

- (1) 姓名の漢字表記: 「岡田祥平」
- (2) 姓名のひらがな: 「おかだ しょうへい」
- (3) 姓名どちらかのひらがな表記: 「おかだ」もしくは「しょうへい」
- (4) 姓名から派生した愛称: 「おかちゃん」「おかしょー」「Show Hey」など

(1)や(2)のような「名前」を使用していると、個人を特定が非常に容易であることは想像に難くないであろう。一方、(3)や(4)のような「名前」であれば、個人を特定の特定につながるだろうと思う方もいるかもしれない。しかし、本節のIIIで述べるような情報を組み合わせれば、(3)や(4)のような「名前」であったとしても個人を特定は比較的容易であることは強調しておきたい。

また、「ユーザー名」(1. 節の図1の③を参照)に本名を使用することも慎重になるべきであることも、ここで改めて繰り返す必要はなかろう。ただし、「ユーザー名」はアルファベットしか使用できないため、漢字表記が可能な「名前」よりは個人を特定する手がかりは低いとも言えそうである。その一方で、「ユーザー名」に自分の趣味に関する単語を使用したり、自分の生年月日を織り込んだりすると、種々の情報を手がかり(具体的にどのような情報を手がかりにするのかについては、あえて説明をしないことにする)に、個人を特定される可能性があることも付記しておく(筆者の実体験でもある)。

III 「自己紹介」に個人を特定できる情報は書かない

本節のIIで述べたように、Twitterの「名前」に本名を使用していなくても、Twitterの「自己紹介」(1. 節の図1の④を参照)に、個人を特定できる情報(在籍中の大学名・学部名・学科名・学年・サークル名、出身高校など)を書いている場合を非常に多く見かける。これは、「本名を明記していなくても、プロフィールから自分のことが分かる人とはTwitter上でつながりたい」という思いもあり、本名を明かさない代わりに「自己紹介」に詳細な情報を書く、ということもあるという。

しかし、「自己紹介」に記載した情報から個人を特定することは、それほど難しいことではない。ここで

その方法を記述するのは省略するが、本名を明かしていないから自分のプライバシーは守られるという考えは非常に無邪気であることを強調しておきたい。

また、これも本節のⅡで軽く触れたが、「名前」を本名そのものでなくても、それに類した表記（本節のⅡであげた(3)や(4)のパターン）で、なおかつプロフィール欄に詳細な個人情報を記載している場合も、個人の特定は比較的容易であることを付記しておく。

最後に、「名前」に本名を使用していなかったり、「自己紹介」に個人を特定できる情報は書いていなかったりしていても、なぜか自分の名前を記載したツイートを発信していて、結果的に、個人が特定できてしまったという場合も散見される。このことを踏まえると、「自己紹介」のみならず、ツイート本文にも個人を特定できる情報を書かないということは肝要である。

Ⅳ 「非公開ツイート」設定にする

2. 節でも説明した通り、Twitterの利用する際に、特別な設定をしない場合は「公開ツイート」、すなわち、インターネットに接続できる環境にある人であれば、誰でも閲覧可能なツイートとして発せられる。そのような「公開ツイート」で本節のⅢで述べたような不用意な内容のツイートをする、第三者に発見され、大きな問題となる場合もある（場合によっては、本節のⅠやⅡで述べたような情報を手がかりに、不用意な内容のツイートをした個人の情報が「暴露」され、Twitter上で拡散することもある）。1. 節で引用した新聞記事にあった「冷蔵庫事件」も、その一事例である。したがって、Twitterのユーザーの中には、ツイートを「非公開」とする場合も多い（本節のⅠで示した表の事例も参照）。

2. 節で説明した通り、「非公開ツイート」とは、当該アカウントから「許可されたTwitterフォロワーのみが閲覧可能」なものである。すなわち、「非公開ツイート」という設定をしたアカウントから許可されたフォロワーは、「非公開ツイート」であっても、タイムライン上に、図2で示したような形で、非公開を選択したアカウントからのツイートも表示される。一方、「非公開ツイート」という設定をしたアカウントから許可されていないTwitterユーザーは、以下の図3に示すように、当該アカウントのツイートを見ることはできない。



図3 「非公開ツイート」を選択しているアカウント²⁴⁾の画面（筆者個人のアカウントより）

つまり、自身のTwitterアカウントを「非公開ツイート」に設定することで、たとえ、不用意な内容のツイートをしたとしても、「公開ツイート」のように、インターネットに接続できる環境にあれば誰でも見られるという状態にはならない。また、「非公開ツイート」はツイートが出来ない仕様になっているため、当該ツイートがTwitter上で拡散することもない。そもそも、「非公開ツイート」を閲覧することを許可したのは当該ツイートのアカウント主であり、閲覧可能なフォロワーはアカウント主の知り合いである場合も多いため（5. 節のiiで述べる通り、実際は、そのように単純な話ではないようであるが）、「非公開」で不用意な内容のツイートをした場合であっても、その内容を内輪だけの「ノリ」で楽しむという傾向も認められる（不用意な内容のツイートであっても、外部に漏らさない）。

なお、「非公開ツイート」の設定にしておけば、当該アカウントがフォローしているTwitterアカウントのリスト、あるいは当該アカウントのフォロワーのリスト（これらのリストの詳細については、5. 節のiを参照）を、第三者が閲覧することはできない。それゆえ、5. 節のiで述べるような「危険性」を軽減することができることを付記しておく。

以上のような事項を踏まえると、少なくとも大学生が個人でTwitterを利用する場合²⁵⁾は、「公開ツイート」ではなく、「非公開ツイート」をすることを、筆者としては強くお勧めする次第である²⁶⁾（ただし、5. 節のiiで述べるように、「非公開ツイート」にしたとしても、個人情報が完全に守られるわけではない）。

5. 細心の留意をしていたとしても個人情報は保護されない

前節では、Twitterで問題を起こさないための留意点について、筆者の視点から説明した。そのポイントの一つとしては、やはり非常に単純なことではあるが、「個人が特定できる情報をTwitter上に晒さない」ということになる。

しかし、その一方で、高橋（2014）の以下の指摘にも耳を傾ける必要がある。

しかし実際は、ネット、SNSには匿名は存在しないと思った方がいい。

フォロワー数のごく少数でも、リアルタイム検索などで問題投稿は見つけ出されてしまう。そして、「特定班」にかかれば、個人情報は簡単に特定されてしまうのだ。特定班とは、ある情報から個人や場所などを特定する人たちの総称だ。匿名掲示板などにいるそれらの人たちの情報収集能力は非常に高く、わずかな情報からありとあらゆる個人情報を特定する。夜中に起きた事件が、翌朝新聞の届く前にはもう吊るし上げられていることもあるのだ。

ツイッターだけ匿名で使っていても、普段のやりとりや交流から交友関係が分かり、写真、投稿内容、投稿時間、位置情報、行動範囲、アカウント名などから多くの情報を得ることができる。

つまり、前節のII、IIIで指摘した点に留意し、個人情報をTwitter上で晒していなくても、高橋（2014）が言うような情報から個人を特定できる可能性が高いのであるが、本節では、高橋（2014）が指摘した以外の、個人を特定できる可能性が情報源について簡単な説明をすることを通じ、注意を喚起したい。

i フォロワー関係に注意する

Twitterの「プロフィール」（2. 節の図1参照）に個人情報を書いていなくても、「公開ツイート」であれば、結果的に個人情報を特定することができる。その簡単な方法の一つとして、当該アカウントがフォローしているTwitterアカウントのリスト、あるいは当該アカウントのフォロワーのリストを確認するということがあげられる。

「プロフィール」の「自己紹介」欄の下に表示される「フォロー」（図1であれば「63フォロー」という表示）を押すと、図4のようなリストが表示される。これは、当該アカウントがフォローしているTwitterのアカウントの一覧である。また、「プロフィール」の「自己紹介」欄の下に表示される「フォロワー」（図1の場合であれば「1,748,980フォロワー」という表示）を押すと、図4と同様のリストが表示される。

ここで重要なのは、フォロー、あるいはフォロワーのリストに表示されたアカウントが「公開ツイート」を選択している場合、リストに掲載されたアカウント先を確認することができる、という点である。これは、自身がTwitterの「プロフィール」に前節のIIやIIIであげたような個人情報を晒していないとしても、フォロー、あるいはフォロワーのリストに掲載されたアカウント主が個人情報を晒していたとすれば、その関係から、芋づる式に自身の個人情報が暴露されてしまう危険性を含んでいることを意味する。すなわち、自身が個人情報を晒していないとしても、フォローしているアカウント、あるいはフォローされているアカウントが「〇〇大学××学部1年生」と言った個人情報を晒している場合は、そこから芋づる式に自身の個人情報が暴露されてしまう可能性がある、ということである。

フォローリスト、あるいはフォロワーリストの他に、芋づる式に個人情報が暴露されてしまう「手がかり」となってしまうのが、Twitterのリプライという機能である。リプライとはいわゆる返信であり、「@（アットマーク）とユーザー名とで、特定の相手へ向けたツイートを表す」（大月2015）のことであるが、具体的には図5のような画面としてタイムラインに表示される（図5は筆者が作成した架空の例である）。

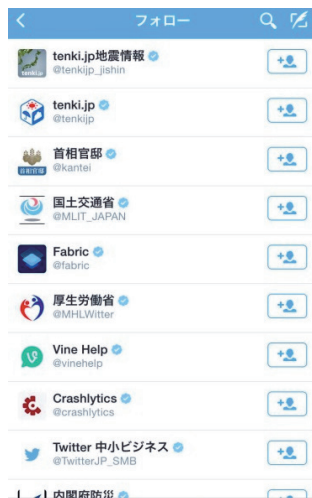


図4 Twitterの「フォロワーリスト」画面
(日本語版Twitter公式アカウント「TwitterJP」より)

AAA 24分

@aaa

@bbb 何やってるの？

BBB 25分

@bbb

@aaa えへへ

AAA 25分

@aaa

@bbb ????

BBB 26分

@bbb

@aaa $\geq \leq$

図5 Twitterの「リプライ」でのやりとりが
表示されたタイムラインの例

図5は、まず、AAAというアカウントがBBBというアカウントに「何やってるの？」と尋ねている。それに対し、BBBが「えへへ」と返信し、さらにそれに対しAAAが「???'と返信…というやりとりを意味している。

ここで気をつけなければならないことは、図5で示したAAAとBBBとの個人的なやりとりは、「非公開ツイート」でない限り、第三者が閲覧可能である、ということである。つまり、図5のようなやりとりは、公開の場で個人間のやりとりを行っている、ということである。

図5の例について、AAAが個人情報を晒していないアカウント、BBBが個人情報を晒しているアカウントだとしよう。AAAは、自分は個人情報を晒していないという気楽さから、不用意な内容のツイートをしてしまったとする。そして、それが不幸なことに第三者に発見されてしまった場合、高橋(2014)のいう「特定班」が、AAAがフォローしているTwitterアカウントのリスト、あるいはAAAのフォロワーのリスト、さらにはAAAの過去のツイートから、個人情報を晒しているBBBを見つけ出す。そのうえで、Twitter上で公開されているAAAとBBBとのやりとりを発掘し、AAAとBBBは実生活でも友人である可能性を割り出す。そして、AAAはBBBと同じ大学の学生であり…という流れで、個人情報をTwitter上に晒していないAAAであっても個人情報が特定されてしまうのである。その過程こそが、上述した「芋づる式」ということである。

つまり、自分自身はTwitter上に個人情報を晒さないように注意、留意をしたとしても、上述した通り、Twitter上でつながっているアカウントの関係から、個人情報を推定することは比較的容易なのである。上述の例はあくまで筆者が想定した例であるが、インターネット上に存在する「特定班」は、筆者の想定以上の方法で、個人情報を特定していると考えられる。したがって、自身はもちろんのこと、自身がTwitter上でつながっているアカウントについても、個人情報を晒していないか、細心の注意を払う必要がある。

また、4. 節のⅢで、「自己紹介」のみならず、ツイート本文にも個人を特定できる情報を書かないということは肝要であることを指摘したが、これは、自身がTwitter上でつながっているアカウントに関しても同様のことが言える。もし、自身がTwitter上でつながっているアカウントが、自身の名前や個人情報をツイートした場合は、即刻、削除するように求める必要がある。すなわち、自身がTwitter上でつながっているアカウントが、普段から4. 節のⅠで述べたような不用意な内容のツイートをしていないかにも十分留意する必要がある。

ii 「非公開ツイート」であっても安心できない

「Twitterヘルプセンター>アカウント>公開ツイートと非公開ツイートについて」(<https://support.twitter.com/articles/243055#>)には、以下のような注記がある。

以前ツイートを開示していた場合、その時のツイートは今後公開されなくなり、Twitterの検索結果にも表示されなくなります。ツイートを表示したり検索したりできるのは自分自身と承認したフォロワーだけになります。

また、上記URLの別の箇所には、以下の記述もある。

非公開ツイートはGoogle検索で表示されない。非公開ツイートはアカウント所有者と承認したフォロワーのみがTwitter上で検索可能。

これらの記述を読む限り、「公開ツイート」から「非公開ツイート」に切り替えれば、「非公開ツイート」に切り替える以前の「公開ツイート」も「自分自身と承認したフォロワー」以外には見えなくなるという印象を受ける。実際、ほぼそうなのであるが、実は、「非公開ツイート」に切り替える以前の「公開ツイート」の一部については、閲覧が可能なのである。具体的には、「非公開ツイート」に切り替えたとしてもGoogleのキャッシュやその他のサイトに「公開ツイート」時の情報が残っていて、そこに残っているツイートは誰でも閲覧可能ということに留意する必要がある²⁷⁾。特に、4. 節の冒頭に引用した高橋(2014)のいう「まとめサイト(事件や話題の情報を集約・編集したサイト)」に転載されたツイートに関しては、そのツイートの存在を消去することはなかなか難しいことは理解しておくべきであろう。

また、本節のiで述べたリプライのやりとりも要注意である。図5を例に説明するならば、AAA、BBB双方とも「非公開ツイート」のアカウントである場合は、二人のやりとりを第三者が閲覧することは出来ない。しかし、AAAが「非公開ツイート」のアカウント、BBBが「公開ツイート」のアカウントという、非対称的な関係な場合、図5のやりとりは、第三者には以下の図6のように表示される。

BBB	25分
@bbb	
@aaa えへへ	
BBB	26分
@bbb	
@aaa ≧ ≦	

図6 図5において、BBBが「非公開」のアカウント場合の第三者から見えるリプライ」でのやりとり

図6を見ると、「非公開ツイート」のアカウントであるAAA(個人情報を晒していない)のリプライは、第三者からは閲覧不能であることがわかる。しかし、「公開ツイート」のアカウントであるBBB(個人情報を晒している)のリプライは第三者であっても閲覧可能なのである。したがって、個人情報を晒していないAAAであっても、個人情報を晒しているBBBと親しい関係にあるということは容易に想定できるし、そのことから、AAAの個人情報を推測することも比較的容易であるのである。

さらに、「非公開ツイート」のアカウントであってもフォロワーを完全に信用できない、という点にも留意したい。

2. 節で述べた通り、「非公開ツイート」とは「許可されたTwitterフォロワーのみが閲覧可能」なツイートである。自身がよく知っている(実生活での知り合いの)アカウントに対してのみ、フォロワーになることの許可を出せば問題はないのかもしれないが、津田(2009)が指摘するTwitterの特徴の一つである「ゆるい空気感」(註26も参照)を楽しむあまり、よく知らない、あるいは全く知らないアカウントについても、ゆるいつながりを楽しむため、フォローすることを許可してしまうこともあるかもしれない。しかし、深く考えずにフォローの許可を出したアカウントが実は悪意を持っていた場合²⁸⁾、「非公開ツイート」であっても、第三者が閲覧可能な方法で拡散する危険性は否定出来ない。

また、Twitterの仕様上、「非公開ツイート」はリツイート(2. 節参照)が出来ない。ゆえに、「非公開ツイート」の内容は第三者には漏れないと考えがちである。しかし、実際にはそうではない。以下に引用する高橋(2014)が指摘を熟読されたい。

ネットやSNSに書き込んだり、写真や動画を投稿したりすると、データはコピーや転送することが出来る。画面はスクリーンショットやキャプチャを撮って、画像や動画はダウンロードして、個人によ

て保管されてしまう。いかようにも保存ができるのだ。

すなわち、「非公開ツイート」であっても悪意のあるフォロワーがいた場合、「非公開ツイート」であるという気楽さから個人情報や不用意な内容のツイートをしてしまうと、そのツイートを画像などで保管されてしまい、場合によっては第三者が見られる形で拡散されてしまう危険性がある、ということである。

以上のような事例を踏まえると、「非公開ツイート」であったとしても、決して安心はできないのである²⁹⁾。

6. おわりに

以上、Twitterを現代日本語研究に利用しようと模索している筆者が、日常の観察の範囲で気づいた、大学生のTwitter利用の問題点に基づき、大学生がTwitterを利用する際の留意点を述べてきた。Twitterのヘビーユーザーでない筆者が少し観察しただけでも、Twitterを利用するリスクは非常に大きく、大学生が安易な気持ちでTwitterを利用すると、場合によっては今後の人生をも左右しかねない事態に陥るケースに直面する可能性があることも否定出来ない。本稿を閉じるにあたって、その点に関連して、ここでも、高橋（2014）の重要な指摘を紹介しておきたい。

高橋（2014）には、以下のような記述がある。

もはや、人事採用担当者の大半は、新卒採用候補者をインターネットやSNSで検索することが当たり前となっている。問題のある従業員を雇うことで、企業は不利益を被る可能性が高くなってしまう。そこで企業は、採用する前から不利益をもたらす可能性がある従業員を選別し始めている。つまり、採用前に候補者についてネットやSNSで検索して、その書き込みや評判などを見て、合否の参考にするようになってきたのだ。

実際、某企業の人事採用担当者は、「SNSだけで採用・不採用を決めることはないが、他に同程度の評価の候補者が複数いた場合、考慮に入れる」と明言している。

米国では、2014年の採用担当者への調査で、「SNSの投稿内容で不採用を決定したことがある」との回答が5割を超えたという。逆に、「SNSのアカウントを見て採用を決めた」という回答も一定割合存在する。今後、日本でもこの傾向が加速することは間違いない。

すなわち、Twitterをはじめ、各種SNSの利用状況を検索することで調べ、そのことにより素行を調査するという風潮が成立しつつある、ということである。

特に教育学部の学生、教員志望の学生であれば、教員として教壇に立ったとき、保護者がそのような検索を行い、学生時代の「武勇伝」（不用意な内容のツイート）を目にし、結果的に保護者からの信頼を失ってしまうという事態になりうることはもちろんのこと、大学生時代教育実習生として実習校に行ったとき実習生先の児童生徒が同様のことを行うという可能性も考えるべきであろう。そのようなリスクがあるTwitterを大学生時代から使うのかということも、慎重に考える必要がある。一度、Twitter上に個人情報を晒していないか、あるいは晒されていないか、自分の名前や個人情報をツイート検索エンジン³⁰⁾やTwitterのプロフィール検索サイト³¹⁾で検索し、確認するのも良いであろう。

最後に、社会人になってからのTwitter利用についても、十分留意すべきである。個人情報を晒してなくても、少なくとも仕事の内容についてのツイートは絶対に避けるべきである。この点については本稿の主目的ではないため詳述は避けるが、匿名のアカウントであるものの、教員が自身の受け持っている生徒や部活動のことをツイートしている事例を見つけた。これは、学生時代の気楽なノリでTwitterを使用している悪例だと思った次第である。

謝辞

本稿を成すにあたっては、新潟大学教育学部国語科学生（本稿執筆時・4年生）の西川由樹氏と波多野紗稀氏との個人的談話から、有益な示唆を得た。記して御礼申し上げますと同時に、本文中で言及した事例については、この兩人には一切関係のないことを、本人の名誉のためにも付記しておく。

付記

本文中にあるURLは、特に本文中でことわりをしない限り、2015年6月25日に最終確認を行った。

付記2

本稿の校正作業中(2015年10月)、Twitter社日本語公式ページの「ヘルプセンター>ポリシーと報告>活用例>安全とセキュリティ」に、以下に示すような解説のページが存在することを発見した。以下に示した三つの解説は本稿で述べたことと密接に関連する事柄が簡潔にまとめられているので、ご確認になることを強くお勧めする次第である。

- ・「先生方へのアドバイス」(<https://support.twitter.com/articles/20170982>)
- ・「保護者の皆様へのアドバイス」(<https://support.twitter.com/articles/20170974>)
- ・「10代のユーザーの皆様へのアドバイス」(<https://support.twitter.com/articles/20170978>)

註

- 1) 本稿では、引用箇所を除き、当該サービスのことを「Twitter」とアルファベット表記する。これは、岡田祥平(2014b)でも言及したように、当該サービスを提供しているTwitter社が当該サービスのことを言及するときにはカタカナ表記ではなくアルファベット表記を使用していることによる。
- 2) この点については、Twitterの蔑称である「バカッター」「バカ発見器」が(インターネットスラングとといった隠語ではなく)一般紙にも使われるような語彙になった時期と、その過程を明らかにした岡田祥平(2014a)での議論も参照。
- 3) 高橋(2014)の出版年月日(2014年12月5日)に鑑みると、高橋(2014)が指摘するネットリテラシー教育を受けないまま現在に至っているケースが多い大学生というのは、本稿執筆時(2015年6月)における現役大学生が該当して考えてもよさそうである。
なお、高橋(2014)の「著者紹介」欄によると、高橋暁子氏は、「元小学校教員で、Facebook・Twitter・LINEなどのSNS、子どものネット・スマホの安全利用や情報モラル教育に詳しい」とのことである。
- 4) 図1はiPhone6で利用可能なTwitter公式アプリケーションの画面表示であるが、パソコンのインターネットブラウザなど、他の媒体を経由しても、表示される基本的な情報には相違ない(ただし、インターネットのブラウザ経由では表示される「ツイート」数と「お気に入り」数は、iPhone6で利用可能なTwitter公式アプリケーションでは表示されないようである)。なお、インターネットのブラウザ経由で表示される画面については、図3を参照。
- 5) <https://twitter.com/twitterjp>。アクセス日時は2015年6月20日17時41分。
- 6) このようなアカウントのことを「インフルエンサー」と呼ぶ(大月2015)。
- 7) 岡田(2013)の2.節の図1や岡田(2015)の註22の付表2なども参照。
- 8) http://www.soumu.go.jp/main_content/000357570.pdf。調査は2014年11月に行われたものである。
- 9) 調査対象者となった10代とは、正確には13～19歳までの範囲である。なお、調査対象者数は140人(男性72人、女性68人)である。
- 10) 調査対象者数は計221人(男性113人、女性108人)である。
- 11) この調査では、Twitterを含めた10のSNSについて、以下に示した行為のうち、一つ以上行っている場合を、当該SNSの利用者としてカウントしたとのことである。
 - ・当該SNSをパソコンから「見る」
 - ・当該SNSをパソコンから「書き込む・投稿する」
 - ・当該SNSをモバイル(フィーチャーフォン又はスマートフォン)から「見る」
 - ・当該SNSをモバイルから「書き込む・投稿する」
- 12) 調査対象者数は77人(男性27人、女性50人)である。
- 13) 2015年6月に実施した。
- 14) 本文中に言及した「平成26年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」の問い方(註11参照)に倣い、頻度や媒体は問わず、「Twitterを見る」と「ツイートをやる(書き込む・投稿する)」

の少なくともいずれかの行為をすると回答した学生を、Twitterの利用者としてカウントした。

15) 本稿執筆時点から1年以内に行われたこの種の調査としては、以下のようなものがある。

1 「2016年卒学生の8割超が志望業界を決定、1位は「銀行」

(<http://resemom.jp/article/2015/01/23/22552.html>)

- ・2015年1月に調査。回答者は2016年3月卒業予定の全国の大学3年生（理系は大学院修士課程1年生を含む）1,460人
- ・Twitterの利用率は67.2%

2 「2016年卒学生の就職意識調査」結果報告【2】 広がらない就活でのSNS利用」

(http://www.hrpro.co.jp/research_detail.php?r_no=100)

- ・2014年11月に調査。回答者は2016年卒業予定の大学生・大学院生839名（文系562名，理系277名）
- ・「普段の生活」でのTwitter率は，文系の学生が71%，理系の学生が58%
- ・「就職活動」でのTwitter率は，文系の学生が34%，理系の学生が21%

3 「【アンケート結果】96%の大学生がLINEを利用。大学生のSNSの利用実態」

(<http://www.tnews.jp/entries/11140>)

- ・2014年9月に調査。回答者はt-news (<http://www.tnews.jp/>) に登録する現役大学生・大学院生248名
- ・Twitterのアカウントを持っているのは87%
- ・そのうち，Twitterをほぼ毎日利用しているのが91%

4 「【大学生のSNS活用調査】twitter/facebookどのくらい使っている？本当に大学生が利用しているSNSはこれだ！」(<http://lab.oceanize.co.jp/social-activity/>)

- ・2014年7月に調査。回答者数は584人
- ・Twitterのアカウントを持っているのは73%（ほぼ毎日利用している63%+週に数回利用して10%）

16) 筆者が実際に見たツイートとしては、自身が子どもを性的な視点で眺めて、「合法的」に教育実習に行けることが嬉しいとことを告白するものや、親しげにつきまとう同性の知人のsexualityを揶揄するものである。前者は教育実習に臨む人間としての心構えとして非常に大きな問題であろうし（個人的な性癖はともかく、それをTwitterという公開の場で軽く告白してしまうことは問題であろう）、後者はLGBTの権利意識が高まりつつある昨今においてはあまりに認識が軽い発言である（たとえば、2015年4月30日には文部科学省が「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468.htmという通知を全国の小中高校に出していることも、留意する必要がある）。双方とも「冗談」のつもりであったのかもしれないが、文字言語であるツイートからはそうである可能性は読み取りにくかった（この点は直後の議論も参照）。1. 節で引用した新聞記事の言を借りるならば、「冗談やギャグとは程遠い」ツイートと、少なくとも筆者は感じた次第である。

17) ツイートされた文字情報だけでは、当該授業や教員が批判されたのか、それとも、その批判が冗談交じり、あるいは親しみを込めたものなのか、ということが、にわかには判断できない、ということである。これは、「馬鹿」という文字列が、叱責なのか、あるいは愛情を込めた発言なのか、この文字列からだけではにわかには判断できないということからも、お分かりいただけよう。

18) そもそも、直後に引用する石黒圭（2006）でも指摘されているように、音声言語と文字言語の両者を截然と区別できるわけにも留意したい。なお、この種の指摘は、古くは大石初太郎（1956）にも見られる。

19) 日本でTwitterのサービスの提供が始まったのは2008年4月のことであるが、日本においてTwitterが市民権を得たのは2009年以降のことである。詳細は岡田（2014b）の3.4節を参照されたい。

20) 津田（2009）は、Twitterの特徴として「リアルタイム性」「伝播力が強い」「オープン性」「ゆるい空気感」「属人性が強い」「自由度が高い」という6点をあげたうえで、以下のように述べている。

何と言ってもこれらの中で最大の特徴、それはツイッターの高い「リアルタイム性」だ。

これはそもそものユーザーが投稿を行う基点・モチベーションが、ツイッター側からの「いまなにしてる？」という問いによってもたらされているということが大きい。

各ユーザーが、現在自分が置かれている状況を随時ツイッターでつぶやくことで、それらがタイムライン上で共有される。何か起きた瞬間と、それが書かれた瞬間、そして、それが誰かの目に触れる瞬間がほぼ同じタイミングのため、非常に現実社会への結びつきが強く感じられるのだ。

もちろん、ツイッターでは「いまなにしてる?」という問いへの答え以外にも何でもつぶやくことはできる。しかし、ツイッターでよく目にする、「いま〇〇にいる、〇〇をしている」という意味の「〇〇なう」という表現からもわかるように、何らかの形で自分の状況を「実況」するようつぶやきを発するユーザーは非常に多い。

以上の津田(2009)の記述からも、Twitterは少なくともリアルタイム性、同時性を有しているということが、容易に理解できるであろう。

一方、石黒(2006)が指摘する双方向性については、5. 節のiで説明するリプライの機能を参照のこと。

- 21) 音声言語(日常会話)には存在するものの、TwitterといったSNSやメールでは欠落してしまう音声情報、非言語情報を補完するために、各種SNSやメールでは絵文字や顔文字などが使用されるのであるが(高橋2014、三宅和子2014なども参照)、絵文字や顔文字は音声言語に付随する音声情報、非言語情報を完全に補完するわけではない。
- 22) Twitterが持つこのような側面は、岡島昭浩(2011)が指摘するTwitterを利用した日本語研究の問題の一つである「細切れの発言の前後の文脈がたどりにくく、用語の意味を考察しようとする際に不便である」という点に結びつく。
- 23) 文字言語が持つこのような性質は、概説書でも説明される基本的な事項である。たとえば、文字に関する概説書には、以下のような記述がある(沖森卓也2011、傍点は筆者)。

音声は話し手が口に出して生き生きと発するもので、その発話態度には話し手自身の発話意図や感情など、さまざまな情報も込められている。ただし、それは、近代に発達する録音という保存形式を除くと、発せられると同時に消えてしまうという一回性のものである。すなわち、音声言語は聴覚による直接的伝達である。

これに対して、文字は視覚による言語伝達であり、生き生きとした発話から、アクセントやイントネーション、プロミネンス、ポーズなどの音の抑揚・強弱などの付随的要素を余剰なものとして排除し、文脈を客観化し固定化する。文字に固定化された伝達内容は、それを書き記したものを持ち運べば、空間を自由に移動できる。(中略)このような、音声言語が有する空間的制約から解放した点に文字言語の特性がある。

空間的移動が可能であるということは、時間的移動をも可能にすることでもある。書かれた内容は後世に保存され、音声言語の、発せられた瞬間に消滅するという弱点を克服することになった。

Twitterは空間的制約からも解放されており(それゆえ、全世界に発信したツイートが行き渡るのである)、また、過去のツイートも検索可能という時間的制約からも解放されている。

- 24) 筆者自身のアカウントである。筆者個人のアカウント情報を伏せるため、個人の特定に繋がる情報が表示されている部分については、編集、削除したことを、お断り申し上げる。
- 25) 何らかの広報活動や社会に対するアピール、主張をするためにTwitterを利用する場合は、もちろん、「公開ツイート」とすべきであろう。ただし、そのような目的でTwitterを利用する場合は、ツイートの内容にも責任を持つと考えられるため、本節のIで述べたような不用意な内容のツイートをする危険性は、そもそも低いと考えられる。
- 26) ただし、「非公開ツイート」にするということは、津田(2009)が指摘するTwitterの特徴の一つである「ゆるい空気感」を否定することになる。

津田(2009)はTwitterの持つ「ゆるい空気感」を以下のように説明しているが、津田(2009)のいう「ゆるい空気感」に魅力を覚えTwitterをしている人にとっては、「非公開ツイート」の設定にすることに、抵抗があるかもしれない。「非公開ツイート」のアカウントをフォローするためには、相手の承認が必要になってしまうため、「公開ツイート」より、一段階、自由度が下がってしまうからである。

ツイッターの基本機能である、他のユーザーのつぶやきを自分のタイムラインに表示するようになる「フォロー」という仕組みは象徴的だ。これはSNSにも近い機能だが、ツイッターの場合、相手か

らの「承認」を必要としない。ここに大きな違いがある。

ミクシィの「マイミク」のように、ユーザーの相互承認を前提とするサービスでは、現実社会の人間関係のしがらみに足を取られてしまうことも少なくない。実際、筆者も義理で登録しているマイミクがないと言ったら嘘になる。こうしたSNSは、濃密な関係を築ける一方で、リアルの人間関係が足かせになり、拘束感の強い、閉じたものになってしまう側面もある。

しかし、相互非対称な関係性が前提となっているツイッターは、さほど現実の人間関係を気にする必要がない。自分の興味を引くユーザーがいれば勝手にフォローすればいいし、「@」で話しかけることも簡単にできる。フォローされたからといってフォローを返す必要もなければ、フォローを外すのもまったく自由だ。誰のつぶやきを自分のタイムラインに表示するかは決定権は、あくまでも自分ひとりにあるのだ。

しかし、Twitterは、基本的には「相互非対称的な関係性が前提となっている」ため、自分が「非公開ツイート」で、自分とは別の「非公開ツイート」のアカウントからフォローの許可のリクエストがあった場合、それを一方的に承認することができる。つまり、自分の「非公開ツイート」を自分とは別の「非公開ツイート」のアカウント主に関連許可をする一方で、自分は相手の「非公開ツイート」を読むことができないという「相互非対称的な関係性」も成立しうるのである。もちろん、その「相互非対称的な関係性」を解消するために、自分の「非公開ツイート」へのフォローリクエストをしてきた自分とは別の「非公開ツイート」のアカウント主に対し、自分からもその相手にフォローリクエストを出すということも可能である。しかしそれは、自分の「非公開ツイート」へのフォローリクエストをしてきた自分とは別の「非公開ツイート」のアカウント主に対して、フォロー許可を出すための必須条件ではない。

このように考えると、自分が「非公開ツイート」の設定をしたとはいえ、津田（2009）がいうTwitterの持つ「ゆるい空気感」が失われることはないのである。そのような事実を鑑みても、不用意な内容のツイートをしてしまうかもしれないと思う人には、「非公開ツイート」設定をすることをお勧めする次第である。

27) この事実は、実はTwitter社も把握しているようで、Twitter社は、「すでにツイートを削除または非公開にしたのに、Googleの検索結果に表示される」という質問に以下のように回答している (<https://support.twitter.com/articles/423812-googletwitter#>)。

非公開ツイート

- ・アカウント設定で[ツイートを非公開にする]を選択する前に投稿した公開ツイートはすべて、一般公開されている検索エンジン (twitter.com/searchなど) にインデックスされたままになっています。アカウント設定でツイートの非公開を設定して保存すると、それ以降に投稿するツイートは非公開になります。

削除したツイート

- ・ツイートを削除しても、検索結果はGoogleなどの検索エンジンにキャッシュされているため、古い情報が検索対象になったままであることがあります。Twitterの設定変更はすぐに反映されてツイートがすぐに削除されますが、Googleの検索インデックスに残っている古い情報は削除されません。

また、上記URLでは、「Googleに情報の削除をリクエストする方法とタイミング」についての説明もあることを付記しておく。

28) さらにいうなれば、実生活で知り合いのフォロワーであっても、その人が悪意を持っていた場合、「非公開ツイート」の内容を流出させる可能性も否定できない。したがって、自身のフォロワーが全員、実生活においても知り合い、知人、友人であっても、完全には信用出来ないというのが事実なのである（非常に悲しい現実であるが）。

29) 本稿執筆時点（2015年6月28日）でのタイムリーな事例としては、作家の百田尚樹氏のTwitterが挙げられる。百田氏のTwitterアカウントは本稿執筆時点では「非公開ツイート」になっているにもかかわらず、百田氏のツイートの内容が新聞で報道されているのである（たとえば、朝日新聞2015年6月28日付朝刊の「報道威圧、反発と困惑 自民勉強会発言」という見出しの記事の本文には、「作家の百田尚樹氏は27日、自らのツイッターに「私が同じ懇話会で、『マスコミに圧力をかけるのはダメ』と発言したことは、まっ

たく報道しない」と書き込んだ。」という一節がある)。この百田氏の事例は、「非公開ツイート」が、実はそれほど意味をなさない場合もあるということの証左になろう。(本稿校正時である2015年8月19日現在、百田氏のアカウントは「公開ツイート」に戻されている)

30) Twitter社公式検索 (<https://twitter.com/search-home>) や、岡田 (2013) で使用した「TOPSY」(<http://topsy.com>) などが利用できる。

31) 「ツイプロ」(<http://twpro.jp>) や「Twitterプロフィール検索」(<http://tps.lefthandle.net>)、「TwitterSearch」(<http://www.twitter-search.net>)、「16プロフィール検索」(<http://www.16ps.jp>) などが利用できる。

参考文献

- 石黒 圭 (2006) 「自然な会話とは何か」『よくわかる文章表現の技術Ⅳ—発想編—』明治書院
- 石黒 圭 (2014) 「指示語にみるニュースの話しことば性」石黒 圭・橋本行洋 (編著)『ひつじ研究叢書〈言語編〉第112巻 話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房
- 大石初太郎 (1951) 「話し言葉とその研究」『国語学』第24輯
- 大月宇美 (2015) 「インターネット」『現代用語の基礎知識2015』自由国民社
- 岡島昭浩 (2011) 「ウェブ検索の応用」荻野綱男・田野村忠温 (編)『講座ITと日本語研究6 コーパスとしてのウェブ』明治書院
- 岡田祥平 (2013) 「Twitterを利用した新語・流行語研究の可能性—アイドルグループ「Sexy Zone」の略語を例に一」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第6巻第1号
- 岡田祥平 (2014a) 「インターネットを利用した新語・流行語研究の可能性—「Twitter」の蔑称の拡散過程の検証を例として—」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第6巻第2号
- 岡田祥平 (2014b) 「「Twitter」のカタカナ表記は「トゥイッター」か「ツイッター」か—外来語受容における「原音主義」と「慣用主義」の相克—」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第7巻第1号
- 岡田祥平 (2015) 「新語・流行語に与えるマス・メディアの影響力—「壁ドン」の二つの意味を例に考える—」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第7巻第2号
- 沖森卓也 (2011) 「総説」沖森卓也・笹原宏之・常盤智子・山本真吾『図解日本の文字』三省堂
- 川上量生 (2015) 『鈴木さんにも分かるネットの未来』岩波書店
- 五味伸之・辰巳 暢・新田優喜 (2011) 「Twitterを利用した言語形態の変化についての研究」『福井工業高等専門学校研究紀要 人文・社会科学』第45号
- 高橋暁子 (2014) 『ソーシャルメディア中毒 つなかりに溺れる人たち』幻冬舎
- 津田大介 (2009) 『Twitter社会論 新たなリアルタイム・ウェブの潮流』洋泉社
- 原田曜平 (2015) 「ツイッターを複数使い分ける、若者の本音 さとり世代に「二十面相」が増加中？」『東洋経済ONLINE』(<http://toyokeizai.net/articles/-/62744>)
- 三宅和子 (2014) 「電子メディアの文字・表記—「超言文一致体」の現在(いま)と未来—」高田智和・横山 詔一 (編)『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』彩流社